アルザスのJ. レンツ

――とくに「ドイツ協会」との関連において――

八　亀　徳　也

J. Lenz in Alsace

―especially in relation to the Deutsche Gesellschaft

YAKAME Tokuya

The German poet Jakob Lenz (1751–92) from Baltic world made three speeches, "The reformation of German language in Alsace, Breisgau and their surrounding areas", "The advantages of German language", and "The purpose of the new association in Straßburg)" in 1775. He made these speeches in Strasbourg, where he was most active as a writer in his lifetime. All the above speeches were made for the Deutsche Gesellschaft, in which he was the de facto leader working as the secretary. He appealed the importance of reforming German language against the French, which was the absolute authority in the European world at the time, and also appealing the importance of the Deutsche Gesellschaft as the activator of the reform. Lenz had strong interest in social problems and social contradiction of the day, in addition to his original writing works. Such interests made him contribute to reform the German by leading the association. Lenz's interest in social reform came from the recognition of severe reality that the controlling ethnic group and the controlled ethnic group co-exist. He had seen such social difficulty in Baltic nations where he was born and grew up.

1

18世紀後半のドイツ文学界を足早に駆け抜けた疾風怒濤（シュトゥルム・ウント・ドラング）時代の代表的詩人、ヤーコプ・ミヒャエル・ラインホルト・レンツ（1751–1792、以下レンツ）の主要作品が成立したのは――彼自身、バルト世界の出身でありながら――そこからドイツを越えてさらに遠く離れたフランスのアルザスにおいてであった[1)]。もともと、父の指示に従って1768年秋に弟、ヨーハン・クリスティアーン（1752–1831）と一緒にケーニッヒスベルク大学に入学し、将来は当然牧師職に就くことを求められていたにも拘らず、入学後はむしろ哲学や文学に傾倒し、卒業まであと半年という1771年春、将校としてフランス軍に入隊するフォン・クライスト男爵兄弟（フリードリヒ・ゲオルク、1751–1800；エルンスト・ニーコラウス、1752–1787）についてストラスブールに旅立ってしまうのである[2)]。これから、彼がこのストラスブールを去ってゲーテのいるヴァイマルへ赴く1776年春までの５年間が、彼の最も輝かしく生産的な創作期間であった[3)]。しかし同時に、この時から、彼に一生涯つきまとう放浪者的生活が始まるのである。

ストラスブール時代の代表作として挙げられるのは、ローマの喜劇作家、ティトゥス・マッキウス・プラウトゥス（前254頃—184）の５作品を、レンツ流のユーモアとイロニーの精神で見事に脚色した翻案劇（1772/73）、タイトルにも使われている（当時の）“家庭教師”による教育のみならず、その対極に置かれた公教育、すなわち学校教育をも鋭いイロニーの手法で描写している『家庭教師』（1774）、疾風怒濤時代で唯一の演劇論とも言うべき、しかし余りにも「ラプソディー（狂詩曲）」風な『演劇覚え書』（1774）、シュヴァーベンの革命的詩人、クリスティアーン・フリードリヒ・ダーニエル・シューバルト（1739–1791）の呼びかけに応じて成立したシラー（1759–1805）の『群盗』（1781）と同工異曲の未完作品『有徳のろくでなし』（1775/76）、市民階級と貴族階級の決定的な身分違いの問題を具体的な現実の状況に照らし合わせてドラマ化した『軍人たち』（1776）、等々である。

以上の作品は、むろん疾風怒濤期に書かれたものであり、とくに二番目の『家庭教師』と五つ目の『軍人たち』は、この時代に頻繁に作られた市民劇の代表作でもある。しかし我々は、レンツの諸作品に見られる社会改革的傾向をも注視すべきであろう。この特徴は従来の研究において、レンツという詩人を止むを得ず疾風怒濤詩人の範疇に入れてしまったがためにほとんど顧みられなかった側面である。例えば、『軍人たち』の女主人公マリーは、まさに当時の身分社会の典型的な犠牲者となり、また市民階級の埒を踏み外したマリーを引き取って世話をするド・ラ・ロッシュ伯爵夫人は身分差別を押し付けて憚らない。しかも興味深いのは、第５幕

第5場で、社会を騒がせ市民女性とその家族を不幸に陥れた若い将校たちの上官、伯爵フォン・シュパンハイム大佐が責任を感じながら、対談相手のド・ラ・ロッシュ夫人に提案する計画である。すなわち彼は、健全な市民女性を不埒な軍人たちの毒牙から守るために、国家が軍人慰安婦養成所を設立して、ここの女性に国家への忠誠心を持たせて男たちの相手を勤めさせ、生まれてくる男児は国の費用で軍人へと仕立て上げる、そうすれば国家は募兵の費用も節約できる、と言うのである。この結末部分は同時代人の現実認識に訴えるものではあったろうが、やはり人々の顰蹙を買いそうなスキャンダラスな終わり方である[4]。これよりもむしろ細かい数字と具体的な方策を挙げて建設的な提案をしているのが、軍制改革の建白書たる『軍人の結婚について』(1773-1776) である。この改革案が、ゲーテ同様にヴァイマル宮廷に召抱えられることを意図したものであったことばかりでなく、フランス宮廷にも読んでもらうために、様々な形のフランス語原稿が残されていることからも[5]、レンツがこの社会改革の問題に如何に強い情熱と自信を抱いていたかが明らかになるであろう[6]。

社会問題ないし社会改革に対してレンツがこのように強い関心を持っていた理由はいくつか考えられようが、その関心の淵源は、彼がヨーロッパ世界の中心から離れたバルト世界で生まれ育ったという事実に求められる。と言うのは、彼が牧師の次男として生を享けた現ラトヴィア共和国のツェスヴァイネ (独名ゼスヴェーゲン) も、少青年時代を送った現エストニア共和国のタルトゥ (同ドルパト) も、当時の領国リーフラント (リヴォニア) に属し、中世・近世以来ドイツ人、スウェーデン人、ロシア人たちの支配を受けてきたこの地の住民は、他の周辺領国と同じく農奴として隷属状態を強いられ、若いレンツは彼ら被支配者階級の虐げられた惨状を目撃せざるを得なかったからである。彼らに対する観察眼と思い入れが明瞭に表れているのが、彼の処女ドラマ『傷ついた花婿』(1766) である。これは作者がわずか15歳のときの作品で、レンツの父親と親しい間柄にあった男爵フォン・イーゲルシュトレームが7年戦争 (1756-1763) に参戦した際にドイツから連れ帰った若い下男が、主人から叱責されたことを逆恨みして、結婚を間近に控えた主人を刺し重傷を負わせるが、男爵は辛うじて一命を取りとめ無事に婚礼を執り行なった、という事実に基づいている。注目すべきは下僕の描き方である。レンツは新郎新婦の成婚を寿ぐこの作品の中で、主人の用事で出かけたあと悪友の誘いに乗って賭博に手を出し、3日も帰宅が遅れたことの弁解と、これがために主から受けた屈辱的な打擲に対する異常な怨念とを、このような作品にはむしろそぐわない位に具体的に下僕に語らせている。本来なら、支配階級たる貴族の主人公の陰に隠れて十分な発言権を持たない下層民であるのに、この語らせ方は異例の扱いである。18世紀後半の西ヨーロッパには見られなかった社会構造の下での人間関係、身分差をよく観察していた少年レンツの手腕であると言える。生涯、

性格劇は（自ら主張しながら）書かず、専ら人間社会の中で蠢く様々な人物についての芝居、すなわち„das Gemälde der menschlichen Gesellschaft“（人間社会の絵図）を目指していたレンツの基本的態度が、すでにここに表われているのである。

次章以降で、アルザスにおけるドイツ語の復権を願うレンツの社会活動の一つである「ドイツ協会」設立を巡る問題を検討するが、その前に、当時のアルザスのドイツ語事情に目を向けておく必要があろう。

2

フランス東北部に位置するアルザス地方は、南のオ・ラン県と北のバ・ラン県に二分され、ライン河を自然の境界線にしてドイツ、バーデン・ヴュルテンベルク州のバーデン地方と向かい合っている。古代、アルザスにはケルト人が住んでいたが、「紀元前1世紀に、まずゲルマン部族に」[7] 侵略されたあと、一旦ローマ人に支配され、やがて4世紀末に始まった、いわゆるゲルマン民族大移動により5世紀からアレマン人が定住し、これ以降長くアルザス地方の大部分で、ドイツ語の一方言であるアレマン語が使用されることになる[8]。

一方、後には、宗教改革および印刷術の発明により、文語としての標準ドイツ語も広まってゆく。それからのアルザスの数奇な政治的運命は人のよく知るところである。すなわち、1648年に三十年戦争が終結すると、アルザスは神聖ローマ帝国から離脱してフランス王国の版図に入り、1870年、フランスがプロイセンに敗れてこの地域はロレーヌとともにドイツの領土となり、こうしてドイツ時代が暫く続いたあと、1918年、ドイツの第一次世界大戦での敗北により、アルザスは再度フランス領となる。やがて第二次大戦勃発後、1940年にドイツ軍が侵攻し、ナチス・ドイツの支配下に入るものの、1945年以降、三たびフランスの領土となるのである。このようにして支配者が交代する毎に、アルザス人は体制に従属するだけでなく、母語であるアルザス方言を保持しながら、あるいはドイツ語あるいはフランス語を受け入れるよう強制されて来たのである。そして結局、独立国家を樹立することはなかった。

レンツがストラスブールに来た頃、アルザス地方はまだ大革命後ほどのフランス語の強要を受けておらず、ストラスブールも比較的ドイツ語が許容されている土地であった。ストラスブール大学にはドイツ出身の学生もおり[9]、その内の一人がゲーテ（1749–1832）で、彼がここで学んだことは後にドイツ文学史上象徴的な出来事となる。彼はライプツィヒ大学遊学中に病を得、一度故郷のフランクフルト（アム・マイン）で静養してから、1770年4月よりこの大学で学んでいたのである。このゲーテとレンツが知り合いになるのは、ストラスブールの後見人裁判所書記ですぐれた教養人であったヨーハン・ダーニエル・ザルツマン（1722–1812）が1767

年に設立し主宰していた「哲学と文芸の会」(Société de philosophie et de belles lettres)[10] においてであるが、レンツは熱心な会員として、遅くとも入会した1771年末からほとんど毎回例会に出席し、ストラスブールを離れて駐屯地のランダウにいた1772年秋には名誉会員に指名されたくらいであった[11]。1775年夏からは書記として会のイニシアティヴを執り、「哲学と文芸の会」を、当時ドイツ各地で興っていた前例に倣って、(ストラスブールの)「ドイツ協会」(Deutsche Gesellschaft) へと改組する。1775年11月9日の会合の議事録には、レンツを含めて32名の会員の名前が記されているという。大部分は、ポメルン、スウェーデン、ゴータ、ベルリン、ゲティンゲンなど遠方から来て、一時的にストラスブールに滞在した学生、医者、法律家であったが、ストラスブール市民も所属しており、その中には13人の教師、1人の楽団指揮者、1人の市参事会役人、2人のストラスブール出身の学生がいた。また、この32人の内の3人が作家であった。すなわち、レンツと同じく疾風怒濤時代を代表し、市民劇『後悔先に立たず』(1775) や『嬰児殺し』(1776) で知られるハインリヒ・レーオポルト・ヴァーグナー (1747–1779)、ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』(1774) からヒントを得て、『若きオルバンの最後の恋』(1777) を書いたルイ・ラモン・ド・カルボニエール (1755–1827)、そしてレンツ自身である[12]。

「ドイツ協会」でレンツは、主宰した17回の内10回自ら原稿を発表するが[13]、「アルザス、ブライスガウおよび隣接諸地域におけるドイツ語の改革について」(Über die Bearbeitung der deutschen Sprache im Elsaß, Breisgau und den benachbarten Gegenden)、「ドイツ語の長所について」(Über die Vorzüge der deutschen Sprache)、「シュトラースブルクの新しい協会の目的について」(Über den Zweck der neuen Straßburger Gesellschaft) の三つが、以下に扱うドイツ語改革ないし「ドイツ協会」そのものに関する講演である。

3

1775年11月2日 (木曜日) 午後3時、ストラスブール市庁舎向かいのザルツマン氏宅で「ドイツ協会」の例会が催された。この時にレンツが発表したのが、一つ目の「アルザス、ブライスガウおよび隣接諸地域におけるドイツ語の改革について」であり、副題にあるように「学識ある友人たちの会で朗読」(In einer Gesellschaft gelehrter Freunde vorgelesen) されたのである。ところで、この講演に先立つ同年10月13日、彼はコルマールの詩人、軍人、教育者であるコンラート・プフェフェル (1736–1809) に宛てた手紙の中で、協会への支援を頼むかたわら、会の目的を「当地のドイツ語方言の改善」(„Verbesserung der hiesigen deutschen Mundart“) および「我々の文章語の高地ドイツ語 (=標準ドイツ語) を出来る限り豊かにすること」(„[...]

möglichsten Bereicherung unsers in Schriften gebräuchlichen Hochdeutsch“）と明言している[14]。この講演は「ドイツ語の改革」と銘打たれてはいるが、改革の為の細かな方策が逐一、順序だてて述べられているような訳ではなく、むしろレンツが普段から考えていた、フランス語との対峙の中でのドイツ語の立場やその改善の根本問題、さらに言語一般についての思想を断想風に表明したものである。

冒頭でレンツは先ず聴衆に「我々は皆ドイツ人である」（„Wir alle sind Deutsche.“）[15]ことを思い起こさせつつ、一世を風靡しているフランス語について語る。曰く、「ある支配的な、しかしもっと言いますと、洗練された言語の優位」[16]であり、「ある洗練された外国語」[17]であり、「フランス人たちの、われわれのよりも磨きぬかれた表現と言い回し」[18]である。洗練されたフランス語と比較してのドイツ語の後進性。レンツは当地のドイツ語を「我慢できないほど間延びしたシュヴァーベン方言（„den unleidlich gedehnten schwäbischen Dialekt“）とまで言い切る[19]。こういう捉え方がすでにレンツや一般ドイツ人の共通認識であったとは言え、ドイツ語についての危機意識でもあったことは容易に首肯できる。なにしろ18世紀ヨーロッパにあってはフランス語が絶対的な教養語であり、ドイツの上流社会ないし宮廷ではフランス語が最も尊重された。あの啓蒙専制君主の代表者、フリードリヒ大王がフランス語においては卓越していたが、ドイツ語が満足にできなかった、というのは有名な事実である[20]。

このようなフランス語優位の実情に対し、レンツはドイツ語について決して希望を捨てていない。むしろ会員たちにドイツ人であることの自意識を喚起しようとする。

> （フランス語の優位が）皆さん方の精神の母なる大地への、つまり我らが力強いドイツ語への古い愛着を押しつぶせなかったということを［...］[21]

> この精神は、皆さん、（フランスへの）帰化を許さないものでありまして、ドイツ人は［...］常にドイツ人のままであり続けるでしょう［...］[22]

レンツはまた、ドイツ語がフランス語に比して必ずしも望みなきものではないことを次のように主張する。

> 我々の言語は、目下まだドイツのたいていの地域で（ここでは、低地および高地ザクセンの地域は除きますが）非常に乏しいですが、しかし言い尽くせないくらいに豊かです。つまり、我々の言語はあまり改革されていません

が、過剰なほどの貯えを持っているのです[23]。

このように始めからフランス語を強く意識したドイツ語改革案の枕詞とはなっているが、彼はフランス語からの影響を拒んでいる訳ではない。ただ彼は、改革の道具にするフランス語をドイツ語の語彙にまでしてしまい、「両言語の純粋性を同じように危うくする独仏語のようなもの（ein Deutschfranzösisch）」[24]が生じることがないよう、また、改革に当たっては簡潔さを旨とし、単語の選択に注意するよう警告している。

改革の根本的方法としてレンツは、標準ドイツ語（Hochdeutsch）、換言すれば、すべての人に理解できるドイツ語を生み出すために、自国および隣国の古今の著作に通暁した、最も洞察力があり、最も趣味のよい、様々な階級出身のメンバーを持つ諸協会を結集することを提案する。こうして、以下のような理想的な状況が生まれる。

> このようにしてのみ、私たちは、ギリシャ人の完成、ローマ人の力強さ、イギリス人の思慮深さ、フランス人の軽やかさを我が物とすることができ、しかも、簡潔さと明確さという我々の言語の特質を失うことがないのです[25]。

興味深いことに、ここまで言語とその話者の洗練性、言わばGebildetseinとを評価してきたレンツは、これとは対立するかのような „rauh“ な（粗野な、荒削りの、未開の）性質、さらに進んで「古いもの」を重視する。

> すべての粗野な言語は洗練された言語より豊かです。というのは、それが理性からよりむしろ心から発しているからです。粗野な人々において単語を作るのは欲求であり、洗練された人々ではそれは高慢であります。前者にあっては、どの単語もその場所、その極めて大事な明確さと永続的な価値をも自然から得ておりますが、後者にあっては、この価値は時代遅れになり、明確さはその働きよりもむしろ流行の勝手気儘により維持されるのです[...]それらの古代の産物と近代のそれとの間には何という違いが、前者には何という力、後者には何という無力があることでしょうか？[...]ゴート的な(gotisch)という単語を、我々にとってそれほど醜い言葉にしてはいけないでしょう。ゴートの大地に外国のすべての長所を移植することを、我々の最高の誇りにすべきでありましょう[26]。

およそ未開のもの、文明化、近代化されていないものの中に活力、生命力を見出そうとする

哲学や思想は古今東西、いずこにも存在するが、レンツの場合、近いところでは、手紙のやりとりによる親交のあったヘルダーからの影響が十分考えられる。また古代世界への憧憬も18世紀ドイツの詩人たちにはっきり認められるものであり、疾風怒濤時代の作家たちはとくに古代ギリシャへの憧れを強く持っていた。ところで、上記引用文中の「ゴートの」という形容詞は、18世紀には一般的に「古風な、時代遅れの、廃れた」という意味でも使われており[27]、モーリッツ・ハイネ（1837–1906）によれば、「17世紀のフランス人たち、とくにボワローは形容詞gotiqueを、野蛮なもの、粗野なもの、無粋なもの、という副次的な意味とともに、中世的なもの、の意味で使用し、これが18世紀のドイツ人たちに模倣された」とのことである[28]。「ゴート的な」というネガティヴな意味を持つ言葉をここで敢えて使用しながら、風刺家レンツはこの語に逆説的な意味を付与し、ゴート＝古いドイツを決して過小評価しない態度を示そうとしている。これに続けて彼は、古い言葉と思考様式との名残を持つドイツ諸地域と、外国から特色を受け入れた諸地域とが融合すること、ドイツのどの有名な都市も、今ふうの言葉より太古の言葉とその意味とに留意する方言辞典のために原稿を寄せること、そしてその上で、クロップシュトック（1724–1803）が理想とするような「学者共和国」[29]の場で、ひとつの統一手段、一方的で独裁的でない「共和主義的な言語使用が顧慮されること、（これらがあれば）我々の言語は、祖国全体に根を広げ、すべての土地から養分を規則正しく吸収する木のように、流行や軽率さの気紛れは何も心配する必要はないでしょう」と希望を語る[30]。

このあとレンツは、ソクラテス以後の哲学が言葉を蝕んできた状況を述べてから、いよいよ民衆の世界に入る。民衆の世界—そこはNatur（自然らしさ、自然状態）の支配する場所である。

> もし我々のいわゆる庶民の家々に入って、彼らの関心、彼らの情熱に注意を払い、そのとき、一定の能動的な動機においては、文法にも辞書にもない自然らしさが現れるということを学ぶとしたら、我々はいかに果てしなく我々の言葉を豊かにし、社会の喜びを増やせることでしょう[31]。

彼はここでオペレッタというジャンルを取り上げ、これが舞台上で得た幸運は「自然らしさの醇化された感情と表現のおかげ」[32]であって、この自然らしさはもともと庶民階級に発し、我々の（すなわちレンツの属する知識人市民階級の）堕落し磨きぬかれた社会に伝えられたのだとする。

最後に彼は、学術のみならず、人間生活の日々の営みとその他すべての出来事において、い

かに多くのことが言葉に、この、他人に自分の考えと願望を伝える手段に依存しているか、あらゆる動物の内で最も無力な人間が、「すべての社会と人間愛のこの緊密な絆」[33] である言葉を、相互理解のためにいかに必要としているかを述べて、以下のように講演を締め括る。

> しかし、もし人々がお互いに 完 全 に 理解し合い、一定の共通な絆によってより近く引き寄せられるとしたら、ドイツの諸地域において実際どれほど多くの相互の不便さが取り除かれ得ることでしょう[34]。

4

二つ目の講演「ドイツ語の長所について」は、1週間後の1775年11月9日に行われた（原稿執筆は10月16日）。レンツは先ず出席者に、「ドイツ協会」が正式に発足することを宣言し、協会の計画とその実行に関心を持つ者は自分の名前をアルファベット順に、彼が用意した芳名簿に自筆で記帳してほしいと頼み、さらに会員の義務として、「この地域における洗練されたドイツ語を採用するための協会の努力を、文書あるいは口頭での貢献によって、もしくはまた皆さんの方の名声と推薦によってだけでも支援して下さること」[35]、またドイツ語で書かれた論文のみ、この協会で朗読することを求めてから、ドイツ語の一般的特長として以下を述べる。

> 我らが言語は学術にとって、またその学術において発明を目指す人々にとって、フランス語よりはるかに有利であります。というのは、ドイツ語は精神に、より多くの自由を与えるからです[36]。

レンツがこの講演でドイツ語の長所と呼ぶのは専ら動詞の役割についてであり、しかもそれは、1）動詞の位置が自由であること、2）動詞が文の中心的要素であること、の二点に限定されている。彼は、名詞類（名詞と形容詞）[37] が言葉の枠しか作らないのに対し、「すべての行為と物事のすべての変化との規定語としての動詞は、あらゆる言葉の、より高貴な部分であり魂である」[38] とし、「動詞を、より自由に使用する言語は必然的に、より高貴でより大胆な言語であり、我々の思想の表現のためには従って、より有利な言語であります」[39] と述べ、これがドイツ語に当てはまるのだという。なぜなら、「フランス人は彼らの動詞のために、一定の指定された位置を持っている」[40] が、「ドイツ人は動詞を、言語の規則に些かも抵触することなく、望むところに置くことができる」[41] からである。そして仏独語の比較を次のフランス語文から始める。

J'aime Dieu et mon prochain（私は神と私の隣人を愛する）

レンツの言うとおり、フランス語ではこれ以外の語順は不可能である。が、ドイツ語では、単語の語順を変え、同時に動詞の位置も変えることにより、違ったニュアンスの文を作ることができる。

Ich liebe Gott und den（ママ）Nächsten（私は神と隣人を愛する）
Gott und meinen Nächsten liebe ich（神と私の隣人を私は愛する）
Gott liebe ich und meinen Nächsten.（神を私は愛し、私の隣人を愛する。）

動詞の位置についてレンツはこれ以上詳しくは論じていないが、1番目の例文では、我々のいわゆる定動詞正置、2番目、3番目では倒置が行われている。

次に彼は、3格と4格の人称代名詞が使われているドイツ文を提示する。

Ich habe es dir gegeben（私はそれを君に与えた）

文成分dirを強調すると、再び定形倒置が為されて、

Dir habe ich es gegeben（君に私はそれを与えたのだ）

となり、「君がそれを私から無理矢理取った」[42] のではなく、私が与えたということを強く表わすと、

Gegeben habe ich's dir.（私が与えたのだ、それを君に。）

と表現できる。「何という簡潔さでしょう！」[43] と彼は言う。 そしてこれに対し、「フランス人なら当然この場合、完全な区切りを使って助けに駆けつけねばならないでしょう」[44] と、仏訳文を示す。*vous*（ママ）*ne me l'avez pas pris, je vous*（ママ）*l'ai donné*[45]（あなたが私からそれを取ったのではない、私があなたにそれを与えたのだ）。さらに、上記、dirを前置した独文に対応する仏文として、*c'est vous*（ママ）*à qui je l'ai donné*（私がそれを与えたのはあなたである）。そしてこれに続けて「これらすべての長所を我々が得るのは、ich、du、erなど

の人称代名詞を我々は動詞の前にも後ろにも置いてよい、ということによるのですが、他方、フランス人には後者（＝動詞のうしろに人称代名詞を置くこと）は、疑問文の場合しか許されていないのです」[46] と説明する。

レンツがドイツ語のもう一つの長所としているのが、「動詞が、これに従属する単語を取り込み、包み込むことができる、従ってそれに続く（他の）動詞と（フランス語より）ずっと強く接続し合い、そのようにして観念の結合を明らかにずっと強く、ずっとうまく促進する」[47] という現象である。そして、「複合動詞の場合、この長所が目に飛び込んで来る」[48] として、かれは先ずフランス語文を挙げる。

> *il est parvenu par ses talents supérieurs et ses vastes connaissances et disposant des graces du Souverain, il a su*—[49]（彼はその卓抜した才能と広範な知識により出世し、そして君主の寵愛を意のままに出来たので、[...] を心得ていた）

彼は、「この場合*connaissances*という単語のところで動詞をもう忘れてしまいましたが、それに対しすべてを動詞の中へ取り込むドイツ人は、私をいかなる危険にも晒しません」[50] と述べ、独訳を掲げる。

> Er ist—durch seine vorzüglichen Talente und durch seine ausgebreiteten Kenntnisse emporgekommen und hat—da er über die Gunstbezeugungen des Fürsten handhaben durfte, die würdigsten Gelehrte（ママ）an seinen Hof zu ziehen gewußt.[51]（下線部は仏文にはない＝筆者）

ここではフランス語の複合過去„est parvenu“、„a su“とドイツ語の現在完了„ist…emporgekommen“、„hat…gewußt“とを比較することができるが、レンツが前出の引用文の中でのように「動詞が、これに従属する単語を取り込み、包み込む」(47)、あるいは「すべてを動詞の中へ取り込む」(50) と言っているのは、普通我々が枠構造（Rahmen, Satzrahmen）と呼んでいるところのものである。

レンツは、独文では動詞が常に直接動詞につながっているので、些かの誤解もあり得ない、フランス人は彼らの言葉の持つ、こういう難点もよく分かっているので、我々ドイツ人が皆必要としない多数の、小さな助辞や接続詞でこの問題点に対処しようとして、彼らの言葉を退屈な、欠伸の出そうなものにしてしまう、と主張する[52]。この意見の正否はとも角、彼が自説を

証明するために引いている、ルソー（ジャン・ジャック、1712–1778）の『エミール』（1762）からの例を見てみよう。

> *notre manie enseignante et pédantesque est toujours d'apprendre aux enfants ce qu'ils apprendraient beaucoup mieux d'eux mêmes et d'oublier ce que nous aurions pu seuls leur enseigner.*[53]（我々の教育上の衒学的な病癖は常に、子供たちが自らはるかによく学ぶようなことを彼らに教えていること、我々だけが彼らに教えられたであろうということを忘れていることである）

これをレンツは以下のように独訳している。

> Unsere unterrichtende pedantisierende Raserei bleibt immer, den Kindern das was sie viel besser von sich selber lernen würden zu lehren und das was sie nur von uns lernen können zu vergessen. *Emile p. 106.*（下線＝筆者）

レンツは、仏文にあってはHauptwort（主要な語、すなわち動詞）がNebenbegriffe（副概念、すなわち動詞以外の文成分）とほとんど恣意的に混ざり合っているように見え、少なくとも動詞間のすべてのつながりが、それらの間に置かれた他の文成分によって断ち切られているのに対し、独文では、動詞が下位の文成分を取り込み、それを伴って前へ進む、と言うのである[54]。確かに上記のドイツ文においては、zu-不定詞„zu lehren"、„zu vergessen"がそれぞれの不定詞句の最後に来て、全体を締め括っており、これも一つの枠構造と言えるだろう（下線部参照）。

同様の観点から彼は、独仏語の複合動詞にも触れ、フランス語のそれは分離しないが、ドイツ語では、少数の非分離動詞がある一方、分離動詞は意味を変えずに分離し、従属する下位成分を取り込み、包み込むことができるとして、二つの比較例を示している。

> *je repousse ce traitre*（ママ）,*je reclame*（ママ）*mes droits*（私はこの裏切り者を拒否する、私は自分の権利を要求する）
> ich stoße diesen Verräter zurück, ich fodre meine Rechte wieder

ils convennaient dans cette assemblée de l'abolition des langues étrangères et concluaient unanimement que—(彼らはこの集会で外国語の廃止で合意し、全員一致で［...］を決定した)

sie kamen in dieser Versammlung über die Abschaffung der fremden Sprachen überein und beschlossen—u.s.w.[55] (下線＝筆者)

このあとレンツは補足的に事務連絡を述べる。「ドイツ協会」を主宰する責任者としては当然であろうが、およそ彼の“ひととなり”からは想像もできないような堅実で整然とした伝達ぶりである。箇条書きにしてまとめると、以下の4項目になる[56]。

1．書記職を引き受けてくれる人が必要である。仕事は、毎回提出された論文を記載すること、3か月に1回、会の事業の概略を読み上げること、必要な場合、通信事務を行うこと、等々であるが、皆さんに異存がなければ私が引き受けてもよい。
2．皆さんが論文の複写を希望された場合の筆耕者への支払いと、会の図書として必要な方言辞典、古い稀覯本、近代の言語学者の著作に対する出費とは、3か月に1回、我々みんなで負担できるだろう。皆さんの中の1人か2人が会計を担当し、やはり1年に4回、会計報告をして頂きたい。
3．講演は、我々が芳名帳に名前を記入した順番で行うが、もし都合が悪くなったら数日前にザルツマン氏か私のところへ届け出てほしい。外部の人か我々の誰かが特別に論文を届けていたら、それを朗読できるためである。
4．協会のメンバーであれ、励ましの言葉を賜る方であれ、我々の有益な懇談のための論文をご寄稿頂きたい。

5

三番目の講演「シュトラースブルクの新しい協会の目的について」は先行する二つのそれに比べて少し趣を異にしている。と言うのも、これが、協会の運営を批判する匿名の論文に対する反論の形を取っているからである。この批判文書は先に協会の例会で読み上げられたものであり、レンツはそれに対して、講演の大部分を弁明、逆批判に費やしている。

匿名批判者はどうやら、自分の講演の順番がなかなか回ってこないのに不満であったようである。この順番は彼も我々も皆始めに了解したではないか、とレンツは言う。それは、「(名前の) アルファベット順に従っており、出来る限り共和主義的な」[57] ものである。共和主義的、すなわち「誰もが、順位も優先もなく、協会の共通の最善のために、我々の控え目な意見と声

を述べること」[58] である。「ただお願いしたいのだが」と、彼は語気を強めて、しかし彼独特の皮肉混じりのユーモアを込めて言う。

> 万事まだ平和と秩序を保っているのですから、まるで家が燃えているかのように、事前から大騒ぎをしないで頂きたい。そして、まるで巨人とケンタウロスが現前しているかのように、自分勝手な妄想のお化けと格闘しないで頂きたい。そんなことをしたら、事情を知らされていないよその人にまで怪訝に思わせたり、気づかせたりしてしまうでしょう[59]。

批判文書もイローニッシュな文体で書かれてあるらしく、レンツは、協会全体にも個人個人の会員に対しても当てこすりを使うのは止めて頂きたい、お互いが持つべき相互の信頼が我々の会の唯一の基礎柱なのだから。自分の意見は、たとえ時にはぶっきらぼうであっても、皮肉な調子で言うより、そっけなく口に出す方がずっと礼儀に適っている、と言う[60]。

かれはさらに文書執筆者への批判を続ける。執筆者は、一協会の何たるかを、一言語の改革の何たるかを全く理解していないか、それらについて熟慮する努力をしなかったかのようにみえる。それとも、人に聞いてもらいたいために、ただ語ろうと思っただけのようだ、と[61]。そして協会のあるべき姿を描いてから核心の問題に移る。

レンツは以前に、協会ではドイツ語で書かれた論文のみ発表することを会員に求めていたが、匿名執筆者はこの点にも反対しているようで、「均一性」(Einförmigkeit、つまりドイツ語)ならぬ「多様性」(Mannigfaltigkeit、すなわちフランス語も許容すること)を要求している。これに対しレンツは、次の二点で反論する。1)この多様性を結びつける手段がドイツ語である。2)協会のすべてのメンバーは、フランス語で書かれた論文を正しく理解し評価するほどこれに堪能でない[62]。そして、まさに真情の吐露のような、本心からの訴えを叫ぶ。

> 我々はいったい、それを使って相互に理解し合おうと思う一つの言語を決めてはいけないのでしょうか。この言語を我々の必要に従って改革してはいけないのでしょうか[63]。

このあとレンツは、協会に備えるべき図書について、購入するかしないかを皆で決める方法を極めて具体的に提案している。つまり、例会毎に、購入すべき書籍のタイトルを価格と一緒にメモ用紙に書いて、それを全会員の間で回し、そこに意見をかいてもらい、そのあと賛否の数を数えるというやりかたである。

レンツは最後に、ドイツの三種類の新聞、マティアス・クラウディウス（1740–1815）の発行していた≫Der Wandsbecker Bothe≪（1770–1775）、フリードリヒ・ニコライ（1733–1811）の≫Allgemeine Deutsche Bibliothek≪(1765–1805)、およびヨーハン・ハインリヒ・メルク(1741–1791）の≫Frankfurter Gelehrte Anzeigen≪（1772–1790）を挙げる。が、列挙はするものの積極的に評価しない。奇しくも、前二者はそれぞれ1774年と1776年に、レンツのドラマ『家庭教師』(1774）の批評を掲載した新聞である[64]。もっともレンツ自身、この講演時の1775年、クラウディウスの論評を知っていたかどうかは不明である。

6

以上我々は、レンツの社会改革的な実践活動の一端を、彼がストラスブールに改組設立した「ドイツ協会」で行なった三つの講演の中に見てきた。彼が大局的見地に立つと同時にフランス語の優勢を意識しながら、ドイツ語の復権とアルザス方言の改革とを図りつつ、いかに「協会」の経営に腐心していたかを確認することができた。確かに、彼の社会改革のプロジェクトは何一つ実現しなかった、という意見もある[65]。論文『軍人の結婚について』はどこの宮廷にも、どこの軍隊にも採用されなかった。しかし彼のように、幼い頃から養ってきた、社会、とくに身分社会に胚胎する諸問題、諸矛盾を厳しく直視する観察眼、それらを実作の中にあくまでもリアルに描写する態度は、例えば同じ疾風怒濤詩人であるゲーテやシラーには見出せない。況してや自ら作家として協会なる組織を樹立して、ドイツ語改革にまで踏み出そうという試みは稀有である。

1776年3月1日、レンツは協会の例会に最後の出席をする。この春に彼がストラスブールを発ち、ヴァイマルに向かったあとは、ヨハネス・フォン・テュルクハイムなる学生が後継者となり、例会も引き続き開催されるが、協会はまもなく衰退する[66]。

注

1）G. v. ヴィルペルトはその著≫Deutschbaltische Literaturgeschichte≪（ドイツ・バルト文学史、München: C. H. Beck 2005）の中で、「コツェブ（1761–1819、多作で知られるドイツの大衆劇作家、長年ロシア宮廷に仕えた政治家・外交官・軍人＝筆者）がバルト地方に漂着したドイツ人であったのに対し、レンツはドイツに漂着したリーフラント人である」と定義しているが（134ページ）、レンツには10年余りの晩年のモスクワ生活があり、この時期にも、細々ではあるがまだ創作、翻訳、家庭教師等を続けていた。

2）彼がもはや帰郷する意志を持っていなかったかどうかは微妙な問題である。なお彼は、1774年9月3日、ストラスブール大学神学部への入学手続きをしている。vgl. Georg-Michael Schulz: *Jacob Michael Reinhold Lenz*. Stuttgart: Reclam 2001, S.31f.

3）もっとも彼はこの5年の間ずっとストラスブールにいた訳ではなく、フォン・クライスト男爵兄弟の、いわば従者として約2年間、Fort Louis, WeissenburgおよびLandauの駐屯地をともに転々とし、その間

何度もストラスブールに戻っては文学活動を続行し、1774年秋に彼らとの関係を断つ。これらの駐屯地で見聞した軍人たちの生態が彼の後の作品に生かされることになる。vgl. Hans-Gerd Winter: *Jakob Michael Reinhold Lenz.* 2. Auflage. Stuttgart/Weimar: J. B. Metzler 2000, S.33.

4）レンツがヘルダー（1744-1803）に送った初稿では、軍人慰安婦養成所の提案者がフォン・シュパンハイム大佐ではなく、ド・ラ・ロッシュ伯爵夫人になっていた。

5）s. Jakob Michael Reinhold Lenz: *Werke und Briefe in drei Bänden*（以下 *WuB*）. Hrsg. von Sigrid Damm. München/Wien: Carl Hanser 1987. Bd.2, S.947.

6）後年、1778年1月20日から2月10日まで、統合失調症（精神分裂病）の兆候の現れ始めたレンツの世話をした、アルザス・シュタインタール地方、ヴァルダースバハの牧師、ヨーハン・フリードリヒ・オーバリーン（1740-1826）は、幼児教育のみならず、不毛なアルザス山地の農民のために農業指導などの社会貢献を実践した聖職者であった。レンツがこのような人物の許へ行った理由を探求することは今後の研究課題となろう。

7）ウージェーヌ・フィリップス（右京頼三）『アルザスの言語戦争』、白水社、1999年、11ページ。

8）形容詞「ドイツ［人・語］の」、名詞「ドイツ語、ドイツ人」を表わすフランス語„allemand“のもとになったのが、ゲルマン人の一部族であるこのアレマン人（独Alemanne）である。因みに、エストニア語の形容詞「ドイツの」は„saksa“（＜独Sachseザクセン人）である。

9）市村卓彦 『アルザス文化史』、人文書院、2002年、234-235ページ参照：「十八世紀中期から状況は変わった。ストラスブールは人口五万をこえフランス東部と南ドイツで唯一の大都市となった。ふたたび多くの外国人学生が『ドイツ語圏のなかのフランス』の大学に進学するようになった。とくにドイツ人学生が当時ヨーロッパでもっとも重要な言語とみなされたフランス語を学ぶために、またフランスの多くの州からドイツ語を学ぶためにストラスブールに来るようになった。」

10）ザルツマンが1760年代始めにこの会を立ち上げたときの名称は＞Gelehrte Übungsgesellschaft＜であった。s. Winter, S.40.

11）s. Schulz, S.25.

12）*WuB*, Bd.2, S.943f.

13）a.a.O., S.943.

14）*WuB*, Bd.3, S.346.

15）*WuB*, Bd.2, S.770.

16）ibid.

17）*WuB*, Bd.2, S.771.

18）ibid.

19）ibid. ただし、「これら諸地域」の方言をシュヴァーベン方言で括ってしまうのは不適切であろう。なぜなら、シュヴァーベン方言はアルザス方言と同じく、アレマン語の中の一方言でしかないからである。もっともこのような大雑把な言い方は、レンツ自身あるいは当時の人々の一般的な慣用であった可能性もある。vgl. Werner König: dtv-Atlas zur deutschen Sprache. Tafeln und Texte. München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1996, S.230.

20）マックス・フォン・ベーン（飯塚信雄ほか）『ドイツ十八世紀の文化と社会』、三修社、1984年、5ページ以下参照。

21）*WuB*, Bd.2, S.770.

22）ibid.

23）*WuB*, Bd.2, S.771.

24）ibid.

25) *WuB*, Bd.2, S.772.
26) a,a,O., S.774.
27) *Deutsches Wörterbuch* von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm. Vierter Band. I. Abteilung. 5. Teil, Sp.1006.
28) Moriz Heyne: *Deutsches Wörterbuch*. Hildesheim・New York: Georg Olms Verlag 1970. Reprographischer Nachdruck der 2. Auflage Leipzig 1905. Bd.1, Sp.1223.
29) *WuB*, Bd.2, S.942.
30) a.a.O., S.774f.
31) a.a.O., S.776.
32) ibid.
33) *WuB*, Bd.2, S.777.
34) ibid.
35) ibid.
36) *WuB*, Bd.2, S.778.
37) 名詞類には代名詞も含まれるが、レンツはフランス語で*substantifs*と*adjectifs*しか挙げていない。s. *WuB*, Bd.2, S.778.
38) *WuB*, Bd.2, S.778.
39) ibid.
40) ibid.
41) ibid.
42) *WuB*, Bd.2. S.779.
43) ibid.
44) ibid.
45) 厳密にドイツ語の人称代名詞に対応させて仏訳するなら、tu ne me l'as pas pris, je te l'ai donné とすべきであろう。同様にその次の文も c'est toi à qui je l'ai donné となろう。
46) 肯定命令文の場合でも人称代名詞は動詞の後に置かれる。
47) *WuB*, Bd.2, S.779.
48) ibid.
49) *WuB*, Bd.2, S.780.
50) ibid.
51) ibid.
52) ibid.
53) ibid.
54) ibid.
55) *WuB*, Bd.2, S.781.
56) a.a.O., S.781f.
57) a.a.O., S.782.
58) ibid.
59) *WuB*, Bd.2, S.783.
60) ibid.
61) ibid.
62) *WuB*, Bd.2, S.784f. vgl. auch S.945:「レンツはこの言葉で、もう一度力強く、二つの導入の講演と、彼

の考えに依ればドイツの統一をもたらすというドイツ語の政治的性格とを弁護している。その後、レンツがストラスブールを去ったあと、講演は圧倒的にフランス語でなされた。しかしすでに、レンツが協会の書記をしていた時にも、時々そうであった。」

63) *WuB*, Bd.2, S.785.

64) 拙論「J. M. R. レンツ受容史覚え書 ── 後世詩人による再生の観点から ──（1）」、『関西大学文学論集』第3号、2005年1月、32ページ以下参照。

65) s. Schulz, S.37.

66) *WuB*, Bd.2, S.943.